

伊豆の薬草とミシマサイコ

NPO 法人伊豆学研究会 橋本 敬之

平安時代に書かれた薬方書「大同類聚方」
だいどうるいじゅうほう

『大同類聚方』に見える病氣と薬方

(杉山茂『薬史から見たふるさと伊豆』)

病 気 名	薬 方	秘 方 伝 来 所	比 定 地
<small>ひふりやまひ</small> 比布利也末比(日震病・湿瘡)	<small>ほしづめ</small> 保鎮薬	三島神社賀茂郡伝・	下田市白浜
<small>うたかたのやまい</small> 宇太加太病(湿瘡)	火鎮薬	武内宿禰方	
<small>えやみ</small> 恵耶美(瘡くおこり)	那支智薬	賀母郡奈疑知命神社之神薬	河津町縄地
<small>はらふくりやみ</small> 波良布久利也民(張満)		田方郡大戸之方	伊豆の国市大仁
<small>しわいばり</small> 之和以波里(淋疾)		田方郡穂養 <small>ほがい</small>	伊豆山権現の祝方
<small>くそふせやみ</small> 久曾布世也民(便秘症)		那賀郡県主	不詳
<small>かたかひやみ</small> 加多加比也美(瘡癰)	伊豆薬	那賀郡三島足木麻呂乃家方	伊那上社
<small>あたはらやみ</small> 阿多波良也民(疔痛)	小島薬	那賀郡県主小島乃家方	不詳
同 上	木畑薬	那賀郡県主小畑乃家方	不詳
<small>かいやみ</small> 加以也美(回病・寄生虫症)	田方薬	田方郡主乃方	不詳

えやみ
恵耶美(瘡くおこり)

ヤマヒララキ 5 分、マクズ 5 分、ハジカミ 3 分、クレ*

ひふりやまひ
比布利也末比(日震病・湿瘡)

メクサ、ニガセリ、布々留禰、クマノヒ(イ)、クララネ、ムバラノミ、カラタチ

または

メクサ 2 分、ニガセリ 2 分、オホシノネ 5 分、クムニイ 2 分、クララ 2 分、ウバ(ラ)ヌミ 2 分、

カラタチ 3 分

あたはらやみ
阿多波良也民(疔痛)

クララ一味粉に研ぎ丸め与ふべし

しわいばり
之和以波里(淋疾)

キワタノミ、スクフサ、エヒツノミ、クララ、キリノカワ、五味を水にて煎ず

かいやみ
加以也美(回病・寄生虫症)

カムバ、ヤマビル、オモトネ、アマキ、アセボリ、ヌワウ、六味を水にて煎ず

かたかひやみ ひびやく
加多加比也美(瘡癰)

カクマクサ、オホシノネ、ツゲドリノキモ、アマキ

または

カクマクサ、オオシネ、ツチタラ、アマキ、オモトネ

『延喜式』(927)卷三十七諸国進年料雑薬伊豆国十八種が伊豆の貢献品として記載される

藍・漆いおすき・商陸・白石脂・白薇・防風・水斛・石斛・瓜蒂・水防已・黄礬石・榧子・薯蕷・蜀椒・

桃仁・决明子えびすぐさ・苺蓀子おにみるぐさ・牡荊子おとこばら(『増訂豆州志稿』)

そのうち現在でも産出している生薬

○商陸(日本名やまごぼう・いおすき) 商陸は秋に根茎を採掘し晒乾して使用、利尿・駆水剤の効能

山野の陰地に生育、春宿根より生じる根は長い塊となって横に延び、薬用とする。

○防風(日本名はまぼうふう) 防風は茎葉根を乾燥して利用、発汗・解熱・解毒剤として効能

○防已(日本名おおつづらふじ) 防已は根茎を春秋に採取して乾燥し、利尿・消炎緩下剤として効能ツヅラフジ科のつる性落葉木。伊豆北部では「カナトヅル」、「カナトヅラ」という。本州の関東以西に生育。雌雄異株で、茎は箸ぐらいの太さで他のものに絡んで伸びる。葉は長柄をもち、円形か広卵形、または多角形で掌状に浅裂しているものもある。花は夏、葉腋から花軸が出て、ごく小さな淡黄色の六花弁が円錐状に群がって咲き、果実は球形で黒い(『日本国語大辞典』)。つるは非常に丈夫で、モッコや籠、炭俵を編み、砥袋や、鯛などの魚を運搬する籠に利用した。『重訂本草綱目啓蒙 14下』「蔓草」に防已、『増訂豆州志稿』には和名「おおつづらふじ」とある。根は『日本国語大辞典』によると漢防己(かんぼうき)というところがあるが、一般的な漢名の薬草名は漢防己(かんぼうい)といい、利尿・リウマチの薬として煎じて飲む。伊豆の山地に生育していたが、つるの用途が広く丈夫なため乱獲されたため、伊豆では現在ではほとんど見る事ができなくなった。アオツヅラはツヅラフジに似ているが、北伊豆では「小僧泣かせ」といい、つるとしての用途はない。こちらも漢方では利尿に用いられる。

○石斛(日本名いわぐすり) 石斛は茎・葉を陰乾して消炎強壯剤として使用ラン科の常緑多年草。暖地の岩または古木に着生。茎は多数の節を具え、線形の葉を互生。夏季、茎頂付近の節から2個ずつの花柄を出し、白色または淡紅色の芳香ある美花を開く。煎薬として強壯・鎮痛・健胃剤に用いる。文化8年(1811)3月15日「被仰渡留」(江川文庫)に当未年分の御用薬種である石斛半斤・柴胡3斤を納める請書を差出している。デンドロビウムは石斛の園芸種。

○署預(日本名じねんじょう) 薯蕷は冬季に根茎を採掘して乾燥させ、滋養強壯剤として使われる

○決明子(日本名えびすぐさ) 決明子は種子を使い、消炎や緩下剤として効能

○牡荊(日本名にんじんぼく・おとこばら) 牡荊は葉を使い感冒・利尿異常に効能

『増訂豆州志稿』に天城山の小嶽に多いとする。葉が人参のように尖る。4〜5月枝先に細い白色の花をつけ、小さな実をつける。

○榧子(日本名かや) 榧子は果実を利用し縦虫駆除剤

イチイ科の常緑高木。日本固有の木で、北は宮城、山形両県以南、四国、九州を経て、南は屋久島に及ぶ。葉は水平の枝に左右2列につき、長さ18〜25mm、幅2.5〜3.0mm。先端は鋭く針となる。雌雄異株。大木で社寺や人家に残っているのは雌木が多い。種子は仮種皮を除いて灰汁に漬け、油をしぼって天ぷら用とし、また炒って食べると回虫を下すに効くといい、咳止めとしての効能もある。材は狂いが少なく、耐久性があるので、巨木からは上等の碁盤を作る。昔は材や枝を蚊いぶしに用い、その煙は良い香りがする。カヤの一種イヌガヤはイヌガヤ科の木で、葉の先に刺すような針がない。神社や寺院の森に大木が残る。

○桃仁(日本名もものたね) 桃仁は種子を使い消炎性鎮痛・駆瘀(やまいだれに瘀)血剤として効能

○肉桂

寛政2年(1790)吉佐美村内に御薬木として肉桂を植え付け、文政6年(1823)伐採、文政9年痛み(樹木に折れなどの損害を蒙る)、天保4年(1833)にも朽腐になった(江川文庫6-2-108・134・137)。

良姜

イズシュクシャ。ショウガ科。中国広東・広西・雲南の諸省、海南島に産する。正保4年(1647)完成の『毛吹草』に大坂に入津する伊豆の産物として記載されている。健胃に良いとされ、芳香健胃薬として、寒冷による胃痛・胃炎・消化不良・腹痛に用いる。また、家庭薬の胃腸薬の原料とする。

アマギテンナンショウ

Arisaema Kuratae Serizawa 天城天南星。通称マムシグサ。サトイモ科の多年草。暖帯〜温帯の林内の地上に生育。天城山東側の山地で発見され新種とされた。産地は限られていて個体数も少ない。和名は天城山で発見されたことに由来する。『増訂豆州志稿』によると、春宿根より生じ、初夏華を開き、実を結

ぶ。根を薬用とするとある。牧野『植物図鑑』では八丈島・三宅島・御蔵島産のシメテンナンショウの球根は食用とある。テンナンショウは清湿化痰湯・二朮湯に利用され、カントウマグシグサはリウマチ・神経痛・肩こりに効く。『県版レッドデータブック』に「環境省カテゴリー:絶滅危惧ⅠA類」とある。

ぶくりょう 茯苓

菌類、サルノコシカケ科。丹那川口家文書(日大国際関係学部図書館蔵)に安永7年(1778)「茯苓買揚帳」があり、川口家を通して出荷していた。内部は肉質で、なまの時は淡紅色で軟らかく、乾燥すると白色で堅くなる。利尿の効があり、生薬として水腫・淋疾などに用いる。

アケビ

木通・通草 「開け実」の意味の名があり、アケビ科の蔓性落葉低木。山地に生え、葉は5小葉の複葉。4月頃淡紅紫色の花をつけ、秋に長さ約10cm、淡紫色の果実をつけ熟して縦に割れる。果肉は厚く白色半透明で多数の黒色の種子を含み甘く美味。つるで椅子・かごなどを作り、茎の木部は生薬の木通で、利尿剤・消炎剤などとする。これに似て3小葉から成る葉を持つミツバアケビがある。似た葉と実をもつ箱根を中心にムベがあるが、こちらは実が割れない。東伊豆町稲取の子どもたちがアケビの花遊びで歌うはやし言葉で「嫁、嫁、起きよ 婿さんが来たよ」という。

イズヒヨドリジョウゴ

ヒヨドリジョウゴはナス科の日本各地に見られるツル性の宿根草。茎は葉柄で他物に巻き付き、密に腺毛(せんもう)がある。葉は互生し、卵形で軟毛が多く、下方の葉は3~5裂する。花期8~9月。ヒヨドリがこの実を好んで食べることから命名されたとされるが、実際にはとくに好んで食べるわけではなく、冬になっても残っていることが多い。中国では、ヒヨドリジョウゴを白英、全草を乾燥したものを生薬名で白毛藤と呼び、解毒、解熱、利尿に用い、また、ガンや急性黄疸型肝炎の治療に用いている。最近、ヒヨドリジョウゴに抗腫瘍作用のある成分が含まれているとの研究もある。普通の花は白色だが、イズヒヨドリジョウゴは紫色の花がつくまで違いがわからない。

キハダ

黄檗、黄肌、黄柏。落葉高木。北海道から九州、千島・樺太、朝鮮半島まで分布。北海道・東北の方言ではシロコといい、木材関係でもシロコという。樹皮の Cork 層が発達し、内皮は鮮黄色を呈する。葉は対生し、3~6対の小葉の奇数羽状複葉である。材は建築内装、器具、薪炭などに使われる。内皮にベルベリンなどのアルカイドを含み、古くから陀羅尼助・御百草・熊胆など胃腸薬として知られる。飛鳥時代から黄色の染料としても使われ、藍との交染で緑色を出した。

ミシマサイコ

Bupleurum scorzoneraefolium Willd. var. *stenophyllum* Nakai セリ科の多年性植物で、日当たりのいいやや乾いた草地に生育する。長さは1m内外、花は黄色、根は黄褐色で太く長い。これを乾燥させて生薬に使う。柴胡は、古くは「和剤局方」(1102~05)に掲載されている。伊豆の柴胡はその頃から有名で、『増訂豆州志稿』には『山野に自生し、殊に狩野・大見・伊東に多いとあり、箱根外輪山の中腹にもたくさんあり、伊豆の国市浮橋ではかつてサイコ掘り棒が大抵の家にあつて商売をするほど採ったという。MOA大仁農場ではかつて田中山で獲れたサイコの写真を保管しているという。駿河から相模にかけて採れるものも三島柴胡といい、そのうち、相模で採れるものは特別に鎌倉柴胡とも呼ばれていた。』

天保6年箕川墨江『伊豆の国懐紀行』は支配知行主酒井氏の家臣で、巡見として廻村し、「(丹那に滞在、平井の鸚鵡石を見学して)この山中にひねもす遊び、あるいは砲を発して鳥獣を狩りし、薬草を採りて慰みとす。この山中柴胡、白朮、芍薬などを名産とす。紫根なども多し。民の助けになれり。」

明治2年「伊豆国賀茂郡已皆済目録」(S1019)

柴胡冥加	本須郷村	永 85 文	新須郷村	永 85 文
	北野沢村	永 90 文	逆川村	永 90 文
	縄地村	永 90 文	谷津村	永 90 文
	笹原村	永 90 文	沢田村	永 90 文
	筏場村	永 130 文	下佐ヶ野村	永 90 文
	小鍋村	永 90 文	大鍋村	永 90 文